修士論文要旨

小学生の対人認知変容および学級満足感に及ぼす対話型写真ワークショップの効果

Interpersonal-cognitive change and school satisfaction: Effects of an interactive photography workshop

村松　雪絵（Yukie Muramatsu）　　指導：菅野　純

第１章　本研究の基本的概念

文部科学省学校基本調査によれば，平成20年度「不登校」の小中学生は約12万７千人。93％の都道府県教育委員会が「人間関係を構築できない生徒が増加」と回答した。そこで本研究では，「学級満足感」と「対人認知変容」を軸に小学生の人間関係づくりに役立つ対話型写真ワークショップの効果と機能を解明する探索的実践研究を行う。

第２章　対話型写真ワークショップ（IPW）について

対話型写真ワークショップ（Interactive Photography Workshop:以下IPW）（村松,2004）は，「自己開示」や「シェアリング」，「集団での行動変容」という点で，学校での人間関係づくりに有効性が認められている構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter: 以下SGE）（國分，1981）と共通しているが，児童が撮影した写真が素材であることから児童の興味や関心，心の内面に直結できる利点がある。

第３章　研究１:対話型写真ワークショップ効果尺度の開発

①IPW効果尺度Ⅰ：評定尺度法４件法15項目（$\alpha=.75$），複数回答法３項目，自由記述１項目，文章完成法形式の，「対人認知変容」尺度１項目。②IPW効果尺度Ⅱ：評定尺度法４件法８項目（$\alpha=.79$），複数回答法３項目，自由記述１項目③児童用自己意識アンケート・４件法６項目（$\alpha=.67$）を作成。

第４章　研究２：小学生の学級満足感へ及ぼすIPWの効果

【方法】　対象：東京都内小学校の５年生男女35名

調査材料：①「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」（河村，1999）-「学級満足度尺度」と「学校生活意欲度尺度」21項目４件法。②児童用主張性尺度（1994，濱口）18項目４件法④児童用多次元共感性尺度（長谷川ら,2008）の，下位尺度「視点取得」及び「共感的関心」16項目５件法。これらに加え第３章に述べた３種の尺度もあわせて使用した。

調査実施時期と場所：2009年10月～11月に，対象児童らの教室にて通常授業時間内の6.5単位を使用（全５回）。

分析：統計パッケージ（SPSS12.0J）を用いた。

【結果】　①分散分析の結果，学級不満足群の，承認，友達関係，学習意欲，学級意欲を高めるIPWの効果が示された（$F(1, 9)=10.35$ $p<.01$, $F(1, 9)=12.93$, $p<.01$, $F(1, 9)=9.10$, $p<.05$）。また，学級児童全体の視点取得を高めるIPWの有効性が確認された（$F(1, 9)=5.35$, $p<.05$）。

第５章　研究３：対人認知変容と友達への親和感の検討

対人認知変容（以下対認変）のメカニズムを検討し，対人認知変容が生じる児童の特徴を明らかにし，対人認知変容を学級内の友達関係づくりに活かす方法を検討する。

対人認知変容（以下対認変）得点に与えるIPW効果尺度変数の影響を検討するため重回帰分析を行った結果，対認変への，他者発見，他視興味からの正の標準偏回帰係数が有意であった（$\beta=.44$, $p<.01$; $\beta=.36$, $p<.05$; $R^2=.27$, $p<.01$）。また親和感得点に対し，「自己肯定感高低」×「PF友高低」×「対認変高低」の三要因分散分析を行った結果，二次の交互作用が有意であった（$F(5, 14)=3.34$, $p<05$）。自己肯定感が低いと，対認変高低にかかわらず親和感が低く，友からのPFを嬉しいと感じると，自己肯定感が低くても親和感が高く，対認変高低にかかわらず親和感が高い傾向が示された。

第６章　研究４：教育臨床におけるIPWの機能

「対人認知の変容」を，児童の学級内での居心地の良さを高めることに活かすIPWの展開法の可能性を検討した。「対人認知変容」尺度の結果から，被対人認知変容度が高かった児童２名に半構造化面接を行い，級友らに生じたポジティブな「対人認知変容」をFBしたところ，児童Ａは「意外だ!」と驚き，昨年いじめられていた体験を語りだし，「これを区切りに，堂々としてみようかな」と前向きな言葉を発した。児童Ｂは「ワークショップ後，クラスで居心地が良くなった」と話した。担任との面接で，児童Ｂの居心地の悪さの原因となる学級での出来事が話され教諭も何とかしなければと感じていたと語られた。

第７章　総合考察

本研究により，小学生の対人認知変容および学級満足感に及ぼすIPWの多面的な有効性と機能が明らかにされた。現場教諭との連携で教育現場での効果的なIPWの展開法も示唆された。本研究ではファシリテーターが媒介となり級友らのポジティブな「対人認知変容」を直接，被対人認知児童にフィードバックすることで，IPWの特徴である「対人認知変容」の効果が，児童らの自己肯定感および学級での居心地感を高めることに有効に機能した。今後の展望として，不登校生徒や自閉症児，聴覚障碍児らも対象としたIPWを発展させると同時に，学級内で居心地の悪さを感じているグレーゾーンの児童の早期発見に役立つ，開発的治療的カウンセリングとしてのIPWの実践研究を積み重ねてゆきたい。